

引用文献

物理学辞典編集委員会編(1984a): クリーブ. 物理学辞典, 培風館, 544-545.
 物理学辞典編集委員会編(1984b): 粘弾性. 物理学辞典, 培風館, 1572-1575.
 樋口敬二編(1988): 中谷吉郎随筆集. 岩波書店, 386p.
 伊藤正男(1995): 我が国の研究体制の高度化をめざして 2. 我が国の学術体制をめぐって. 平成7年度国研協共通問題研究会特別講演資料, 37-60.

工業技術院地質調査所(1996)地質調査所研究評価委員会報告書.
 松本則夫(1996): 東海地域の地下水位変動—地震および地殻変動との比較—. 月刊地球(号外), 14, 33-41.
 Scholtz, C.H., Sykes, L.R. and Aggarwal, Y.P. (1973): Earthquake prediction: A physical basis, Science, 181, 803-810.

NODA Tetsuro (1997): A concept for rehabilitation of geoscience.—A baton pass from Ukichiro Nakaya to Masao Itoh—

<受付: 1997年7月9日>

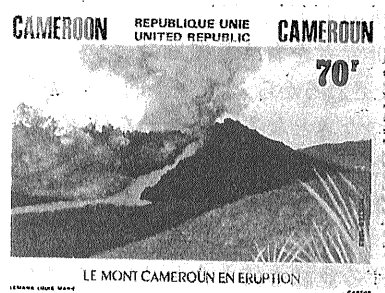
地学と切手

カメルーン火山 1982年噴火切手

P. Q.

西アフリカではチャド湖付近からガルフ湾の海中にかけて北北東—南南西方向に、約1,000km以上にわたってカメルーン火山列が並んでいる。この火山湖は前カンブリア時代の基盤岩を大構造に無関係に切っている。火山活動は30Ma前位に開始されたが、一方、この地域は35—65Maの年代を示す花崗岩や閃長岩の環状岩体が大量にみられるので、カメルーン火山列は第三紀初頭から現在まで活発な火山活動が続いていたと言うことになる。最近でも、1982年のカメルーン火山の噴火、1986年のニオス湖の炭酸ガスの大量噴出と話題が多い。

カメルーン火山は丁度火山列のガルフ湾に接したところにある。山体は白亜紀層と第三紀層を基盤とする成層火山で、基底は50km×35kmの楕円形を示す。最高点は約4,070mである。海拔800mまでは低平で熱帯樹林に覆われる。2,400mあるいは3,000mまでは少し急になり、谷によって刻まれている。2,800mから3,100mまでは多くの溶岩からなり、平である。4,000mまでは急な山容の寄生火山や火口がみられ、最高4,070mのサブ・アクチクと言われるFakoである。海拔3,000mまでの山体の活動は第三紀と考えられている。100以上の円錐体のない火口や、比高10~200mの火山錐が、山頂部から山腹、山麓にあるが、ほとんどが北東—南西方向に配列している。注目すべきは海拔2,875mあたりで巾約1kmの溶岩で埋められた凹地があり、溶岩は南



西山腹に流下している。

噴火活動は紀元前5世紀頃にもあったらしいが、19世紀にも何回か記録され、1909年と1922年には寄生火口で爆発的活動があり、噴石丘が形成され、溶岩も流出した。活動はアルカリ玄武岩である。

1982年の噴火は南西山腹で10月16日から11月12日まで続いた。活動は海拔2,800mのところから起り、以前に存在していた火山錐の火口を切った裂が噴火だったが、新しい火山錐は作らなかった。溶岩は約12km流下した。

噴火の最中には観察は行われず、調査は1983年の初めに行われた。まとめてみると、噴煙は約1.5km上空に達し、火口から0.5kmのところから計測された放出岩塊の最大10コの平均は500kg、0.01mの厚さの放出物により覆われた面積は5.0km²、放出物の量は5×10⁵m³である。火山泥流を作った構成物は大部分は既存の岩塊であった。溶岩はアア溶岩で、平均厚さは30m、噴出源から1km地点で1,070℃、SiO₂44%のアルカリ玄武岩だった。地形変化としては開口割れ目が生じた。損害は無し、溶岩流の長さは12—13km、末端部は海拔約1,200mである。